

〔直訳〕

53 それで言った 彼らに イエスは、  
「まことに まことに 私は言う あなたがたに、  
もし あなたがたが食べないなら 人の子の肉を  
そして あなたがたが飲まないなら 彼の 血を、  
あなたがたは持たない 命を あなたがた自身のうちに。

54 むしやむしや食べる者は 私の 肉を  
そして 飲む者は 私の 血を  
持つ 永遠の命を、  
私も 復活させるだろう 彼を 終わりの日に。

55 なぜなら 私の肉は 真の食べ物である、  
そして 私の血は 真の飲み物である。

56 むしやむしや食べる者は 私の 肉を  
そして 飲む者は 私の 血を、  
私のうちに 留まる、  
私も 彼のうちに。

57 とおりに 遣わした 私を 生きている 父が  
私も 生きる 父を通して、  
むしやむしや食べる者も 私を  
その者も 生きるだろう 私を通して。

58 これは ある パンで 天から降ったもので、  
とおりでない 食べた 父たちが そして 死んだ。  
むしやむしや食べる者は この パンを  
生きるだろう 永遠に。

59 これらを 彼は言った 会堂の中で 教えつつ カファルナウムの中で。

〔新共同訳〕

53 イエスは言われた。「はっきり言うておく。人の子の肉を食べ、その血を飲まなければ、あなたたちの内に命はない。 54 わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、永遠の命を得、わたしはその人を終わりの日に復活させる。 55 わたしの肉はまことの食べ物、わたしの血はまことの飲み物だからである。 56 わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、いつもわたしの内におり、わたしもまたいつもその人の内にいる。 57 生きておられる父がわたしをお遣わしになり、またわたしが父によって生きるように、わたしを食べる者もわたしによって生きる。 58 これは天か

ら降って来たパンである。先祖が食べたのに死んでしまったようなものとは違う。このパンを食べる者は永遠に生きる。」59 これらは、イエスがカファルナウムの会堂で教えていたときに話されたことである。

## ①文脈

⑤千人に食べ物を与える出来事は、イエスこそ命のパンであることを示すしである。この出来事をきっかけとして、群衆はイエスを追ってカファルナウムに来る(24節)。25節からイエスと群衆の対話が始まるが、対話が進むにつれて群衆とイエスとの溝は深まっていく。イエスの言葉を理解できず、つぶやく者となったときに、群衆は「ユダヤ人(イエスと敵対する者を表す語としてヨハネ福音書では用いられることがある)」となる。

⑥51節前半「私は生きていますパン、天から降って来たものである。もし誰かがこのパンから食べるなら、彼は永遠に生きるだろう」は50節までの結びであるだろう。ここでの「パン」は神の言葉を表す比喩的表現である。51節後半は、直訳すると「そして だが」で始まるが、これは新しい段落の開始を示すしといつてよい。これまでは「天から降ったパン」が「肉」とされることはなかったが、ここで初めて「私の肉」とされる。「パン」の意味合いが変わったのである。

⑦食べるべきパンがイエスの肉とされたときに、ユダヤ人はもはやついて行けなくなり、それが「どのように」可能なのかと「言い争う」。この「言い争う」は41節の「つぶやく」と同じような意味である(出一七2)。聖書の中では「つぶやく」という語は、自分の予想や期待を裏切られた者の不服や不満を表す言葉である。

## ②構成

### ① 53節

53節からは、言い争うユダヤ人たちへのイエスの応答である。53節は「あなたがた」ユダヤ人に語りかけるが、54節以下は時代を越えたすべての読者に向けて「むしゃむしゃ食べる者」が招き入れられる境遇が説明される。

### ② 54―57節

54―58節では55節を除くすべての節に「むしゃむしゃ食べる者」が現れる。この者は「永遠の命を持ち」、イエスが「復活させ」(54節)、イエスのうちに「留まり」、イエスも彼のうちに留まる(56節)。さらに彼は、イエスが「父を通して」生きるように、「イエスを通して」生きる。

### ③ 58節

「イエスはパンである」と述べる58節は51節前半と対応するが、パンの意味は変わっている。

### ④ 59節

イエスは命のパンである。この教えはカファルナウムの会堂で語られた。59節は、群衆がイエスを追いかけてカファルナウムに来たと述べる24節と対応している。

## ③ 人の子の肉を食べ、血を飲む(53節)

①イエスは天から降ってきたパンであるが、51節前半までは、人が聞いて従うべき御言葉を象徴するパンであった。だから「パンを食べる」は、イエスの御言葉を受け入れ、深く心にとどめることを意味していた。ユダヤ人も、人を生かす「パン(＝言葉)」があることは認めるが(イザ五

51—3)、イエス自身がそのパンだということは、彼らには受け入れがたい主張なのである。  
⑤ 51節後半の「だが」という接続詞を境としてパンのイメージが変えられる。イエスの与えるパンはイエスの「肉」にほかならない。これを聞いたユダヤ人は、文字通りに「肉を食べさせる」とだと受け取り、耳を疑う。イエスはそれには構わず、人の子の肉を食べて血を飲まなければ、生きることはできない、と言い切る。53節はユダヤ人に直接に語りかけたイエスの言葉だが、54節以下にはもはや「あなたがた」が現れず、むしろ時代を越えてイエスの肉を食べ、血を飲むすべての人々に「肉と血」の意味を語る言葉となっている。

#### ④ 眞の食べ物、眞の飲み物 (54—57節)

① 54—56節では、イエスの「肉と血」は、人に永遠の「いのち」を与え、イエスとの交わりを引き起こす「眞の食べ物であり、眞の飲み物」だとされる。54節と56節は主語がまったく同じであり、両者の対応関係は明らかである。従って、述部も同じことを表しているだろう。

54 むしやむしや食べる者は 私の 肉を

そして 飲む者は 私の 血を

持つ 永遠の命を、

私も 復活させるだろう 彼を 終わりの日に。

56 むしやむしや食べる者は 私の 肉を

そして 飲む者は 私の 血を、

私のうちに 留まる、

私も 彼のうちに。

「(イエスの肉をむしやむしや食べ、イエスの血を飲む者は) 永遠の命を持ち、私も終わりの日に彼を復活させる」ということは、「(イエスの肉をむしやむしや食べ、イエスの血を飲む者は) 私のうちに留まり、私も彼のうちに(留まる)」ということでもある。この二つの節の間に挟まれた55節では、私の肉は「眞の食べ物」であり、私の血は「眞の飲み物」と言われる。「眞の」と言われるのは、54・56節に述べられた「永遠の命」と「イエスとの交わり」を可能にするのは、この食べ物だからである。

② ①のちの交わりはイエスの肉をむしやむしや食べ、イエスの血を飲むことによって実現するが、この交わりには「父」も関わっている(57節)。イエスが「父を通して」生きているように、イエスをむしやむしや食べる者も「イエスを通して」生きることになる。イエスを「むしやむしや食べる」ことによって、父からの「いのち」がイエスを通して人々に与えられる。「通して」と直訳した前置詞は「のゆえに(根拠・源泉)」の意味にも、「のために(目的)」の意味にもなる。ここでは「いのちの源」を示すと共に、「いのちがささげられる目的」を示しているのだろう。

③ 54節から繰り返し使われる「むしやむしや食べる」はギリシア語のトロローゴである。この語の元来の意味は「かむ・かみ砕く・音を立ててかじる」であり、こうした意味合いが薄れて「食う・食らう」を意味する。もともとは人間ではなく、動物が餌を食べることを表す言葉であり、必ずしも上品な言葉ではない。トロローゴはエスシオー(食べる・食事をする)の代用としても使うので、「むしやむしや」といったニュアンスを留めているかどうかは問題だが、51節後半以下の文脈から考えると、イエスの肉であるパンを実際に口にすることを表すために用いられている。  
④ 6章51節以下では、トロローゴは4回登場する(54・56・57・58節後半)。これに対して、51・

52・53・58節前半の「食べる」はエスシオーである。トローゴーがエスシオーに取って代わる理由は、51節前半までと51節後半以下で、「食べる」の意味が変わっている点からも理解できる。51節前半までの「食べる」エスシオーは、比喩的な意味で、御言葉のうちに差し出されたイエスを信じることを表している(35節)。だが、51節後半以下の「食べる」トローゴーは、「私の肉」を食べることを表し、「私の血を飲む」と並行して使われる。つまり、「食べる」トローゴーは、「真の食べ物」であるイエスを実際に口に入れて食べることを表している。「飲む(ピノー)」は「食べる(トローゴー)」と同じく、イエスが与える救いの賜物を受けることを表す。④4回の用例は、「食べる者」が永遠の「いのち」にあずかることを繰り返し強調している。イエスこそが「真の食べ物」だからであり(55節)、これを食べる者は、イエスとの真の交わりに入られ(56節)、イエスを通して生きるからである(57節)。食べることは救いへの招きであり、御言葉を通してイエスへの信仰は、イエスを食べることによっていっそう強められ、確かなものになる。

### ⑤ イエスはパン(58―59節)

④58節は51節前半と対応関係にあるが、単なる繰り返しではない。51節前半のパンは、御言葉を表す比喻であったが、51節後半以下ではイエスの「肉」と言い換えられている。従って、58節の「パン」は、もはや御言葉を表す比喻ではない。イエスの肉である「パン」は荒野でイスラエルが「食べた」パンとは異なる。あのパンは食べても死んだが、この「パン」は命の源泉となる「真の」食べ物である。ヨハネ6章の「パン」は、イエスが誰であるかを示すと共に、「パン」であるイエスを通して神が救いを世に与えていることを告げる言葉である。

④5千人にパンを与えた出来事をきっかけにして、群衆はイエスを追いかけた。イエスと群衆は対話を始めたが、カファルナウムの会堂でイエスが語った教えは、ユダヤ人となった群衆だけでなく、イエスの弟子の間にも議論を引き起こし、多くの弟子が離れ去る(66節)。

### ⑥ イエスのうちに留まり、イエスのゆえに、イエスのために生きる

④a イエスは神の言葉であり、さらに真の食べ物である。イエスの「肉と血」を食べて飲む者は、イエスと深く交わり、永遠の「いのち」にあずかる。言葉によって「いのち」を与えるイエスは、その「肉と血」によってさらに完全な「いのち」を世にもたらす。御言葉としてのパンが、さらに「肉と血」となって「いのち」を差し出している。それゆえ信じる者は聞くだけではなく、具体的に「肉と血」をいただくことによって、真の「いのち」の恵みにあずかる。

④b 永遠の「いのち」とは「イエスのうちに留まり、イエスがその人のうちに留まる」という交わりを生きる「いのち」である。「留まる」という語は、ヨハネ15章では「ぶどうの枝が木につながっている」という言葉では「つながる」という意味で用いられている。ヨハネ福音書では、「留まる」はイエスと信じる者との深い交わりを表す重要な言葉である。

④c イエスのうちに留まる者は、イエスが「父のゆえに、父のために」生きるように「イエスのゆえに、イエスのために」生きる。永遠の「いのち」を与えるために神はイエスをこの世に遣わし、その神のためにイエスは命をかけて働く。この神とイエスが現す救いの業に身を置くことから、新しい「いのち」の交わりが始まる。イエスの肉を食べ、その血を飲むのは、人に永遠の「いのち」を与えるために生き、十字架に上ったイエスの死を思い起こし、イエスの言葉に従って生きるためである。